

伝統が途絶えることで促されるイノベーションへの心理的効果：
陶芸における世代間継承に関する事例研究
**Psychological Effect for Innovation Encouraged by Disconnection of Tradition:
Case Study about Succession among Generation in a Ceramic Art**

竹内 一真

Kazuma Takeuchi

要旨： 近年、伝統工芸においては後継者が現れず、断絶をしてしまうケースが増えてきている。一方で、断絶から復活へと至り、興隆を極めている事例もあり、断絶が完全にネガティブというわけでもない。本稿では復活を行った経験を有するある陶芸の継承者の継承の語りから断絶の意義を明らかにした。調査ではライフストーリーインタビューを行い、復活に至るまでのプロセスに関して話を聞いた。その結果、伝統が途絶えることで促される継承という視点に関して、受け継ぐ技芸の可能性の認知と継承の関係性が明らかになった。

キーワード： 生成的ライフサイクルモデル、ナラティブ・アプローチ、伝統の断絶、イノベーション

Abstract: Nowadays, traditional craft is put on disconnection among generations because of lack of successor. Otherwise, there are some cases which traditional crafts that go from disconnection to revival reach their peak. This study clarified meaning of disconnection among generation about a traditional ceramic art. I used the life story interview to acquire the data about meaning of disconnection for the person who had revived the traditional ceramic art. As a result, this study revealed view point of succession about disconnection of tradition and relationship between succession and potentialities about arts which you want to take over.

Keywords: generative life cycle model, narrative approach, disconnection of tradition, innovation

1. はじめに

近年では伝統的な技術や知識において継承者が現れず、結果として断絶をしてしまうというケースが増えてきている。例えば、鹿児島県では 1988 年から鹿児島県伝統的工芸品指定要綱を定め、鹿児島県伝統的工芸品を指定してきた。2016 年 6 月時点で薩摩切子や種子包丁、蒲生和紙をはじめとして 33 品目が指定されている。しかし、2012 年には知覧傘提灯など 4 品目において後継者が亡くなったことなどを理由として指定を解除されているのである。このように、たとえ県を代表するような伝統的工芸品であったとしても、技芸を受け継ぐ後継者の問題は非常に切実なのである。

後継者問題の背景には伝統的工芸品のニーズが低下しているという切実な事情もある。経済産業省では 1999 年の「21 世紀の伝統的工芸品産業施策のあり方について」という答

申において伝統的工芸品の売り上げが低迷している原因について外的要因と内的要因の二つに分けて現状分析を行っている。外的要因に関しては国民の生活様式・生活空間の変化、生活用品に対する国民意識の変化、大量生産方式による良質で安価な生活用品の供給、安価な輸入品の台頭という 4 点を挙げている。一方で、内的要因に関してはニーズに適合した商品開発の遅れ、新たな流通経路開拓の遅れ、知名度不足・情報提供不足という 3 点を挙げている。外的要因に関しては経済のグローバル化という中で起こっている現象であり、現状において進行が進むことはあっても緩まることはない。内的要因に関しては伝統的工芸品の産地において改善の余地があるところであるとはいえ、突然変えられるかと言えば難しいと言えよう。そのため、伝統的工芸品に関して後継者問題がたちどころに解決するかといったら、困難な状況にあると言わざるを得ないのである。

このような背景もあり、近年では伝統的工芸品を後続世代に継承していくために保護の仕組みが活発化してきている。国際的に最も大きな保護の枠組みと言えるのはユネスコの無形文化遺産の保護に関する条約（以下、無形文化遺産保護条約）ということになる。無形文化遺産保護条約では大きく「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表（以下、緊急保護一覧表）」と「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表（以下、代表一覧表）」の二つのリストに分けられる。保護という観点から重要なのは前者であり、緊急保護一覧表に登録された無形文化遺産に対しては国際援助を含む保護政策が行われる。2016 年 12 月現在においては緊急保護一覧表には 47 件が挙げられている。

では、無形文化遺産において保護・保存とはどのような行為なのであろうか。第一に優先されるのが失伝を防ぎ、後続の世代に途絶えることなく伝えていくことにある。次いで、記録を取り、仮に失われたとしても後続の世代が参照できる状態にすることが挙げられよう。さらに無形文化遺産においては促進や拡充、再活性化といった観点からも文化遺産の保護を行うべきとされている（俵木、2015）。そのため、無形文化遺産の保護においては、当該の無形文化遺産がなくならないように支援することが第一に置かれているのであり、やむをえず失われてしまった場合のために記録を取るということが行われているといえる。

伝統的な技術に関しては継承を促すための積極的な支援がある一方で、伝統を途切れることなく継承することが本当に当該文化の利にかなっているのかということへの検討は十分に行われていない。伝統が途切れることなく次の世代につながっていくということが最重要視されるというのは一見すると自明に思える。しかし、失伝してしまった、あるいはしかかっている伝統的工芸品に関して言えば、なんらかの理由があったからこそ失伝してしまった、あるいは失伝しつつあるのであり、仮に問題を解決せずに後継者だけは持続しているという状態があったとするならば、周囲の人から必要ないと思われるものが、とりあえず続いているということになりかねない。このような状況を避けるためにも、過去から続く伝統的工芸品を現在のニーズに合うようにイノベーションを生み出すことが求

められるのであり、そのために場合によっては共同体において強い固定観念に縛られている技術を一度断絶させ、しがらみを解き放った上で継承するというやり方もありえよう。

しかし、現状では世代が途絶えることがその後の継承やイノベーションにどのような心理的影響があるのかということに十分な研究がおこなわれていない。近年では発達心理学において世代と世代の関係性を意味づけという観点から捉えるアプローチが研究されるようになってきた。やまだは既存の発達研究が誕生から死という世代から切り離された中で研究されてきたと指摘している（やまだ、2011）。その上で、個人が生まれる以前から伝わる知識や技芸をいかに自らのものとして意味づけ、後続の世代に伝えていくのかという循環に基づく発達研究が求められるとして、そのような発達モデルを生成的ライフサイクルモデルと呼んでいる（やまだ、2011：Yamada・Kato、2006）。また、竹内は伝統芸能を対象として、稽古の場に参与観察をして伝えられる技芸がどのように伝えられるのか、また、その伝えられている技芸がどのように世代間の関係の中で意味づけられているのかということを明らかにしている（竹内、2013・竹内・やまだ、2014）。このように伝統を受け継ぐ実践者の意味づけという観点から先行する世代をどのように意味づけ、後続する世代に伝えていくかという世代を視野に入れた発達の研究は進められている。一方で、これまで続いていた世代が断絶した後に、個人がその断絶をどのように埋めて継承に結び付け、後続世代に伝え行くのかという研究は十分に行われていないのである（竹内、2015）。

そこで、本稿では数世代に渡って伝えられてきたものが一度途絶えた上で継承をしたという実践者を対象として、実践者の技芸が途絶えるということの意味づけや断絶から継承に至るまでの過程を明らかにする。その上で、今後の伝統的工芸品に関して伝統が途絶えるということがイノベーションに果たす心理的な役割という観点から考察を深めていく。

2. 方法

本稿では10年近く途絶えていたX焼を復活させたA氏を研究協力者として調査を行った。A氏はX焼という陶芸の継承者であり、X焼を復活させた当事者でもある。X焼は鎌倉時代にまでさかのぼるようなY市という地域では歴史のある焼き物で、土風炉や火鉢など著名な茶陶を産み出してきた。また、安土桃山時代には名のある武将に茶器を献上し、朱印状を受け取ったという言い伝えがある。江戸時代に入り生活雑器を焼くようになると徐々に廃れ始め、昭和初期から戦後にかけてほとんどの窯元が廃業し、A氏がX焼を作陶をする頃にはX焼を継承する陶芸家は一人しかいないような状況であった。

本稿の研究協力者であるA氏は調査時点で64歳であり、陶歴は40年近くになる。中学生のときから陶芸に興味を抱くようになり、高校卒業後に専門学校で陶芸を学ぶようになる。専門学校を優秀な成績で卒業すると、就職先として土産物として人形や皿を作る窯元で3年間ほど実践的な技術を学ぶ。その後、自らの陶芸技術を土産物としてではなく、展

覧会などで評価してもらいたいと思うようになる。そこで、展覧会で活躍する陶芸家のものと住み込みで学び、30歳前後にY市にて独立して窯を構えることになる。

A氏に対しては復活に至るまでのプロセスに関してライフストーリーインタビューを行った。本稿では歴史的な事実に沿っているかということや科学的に先行世代と同一のものを作っているかということよりも、継承者がどのように断絶から継承までの出来事を捉えているのかということを明らかにすることが目的であった。このような当事者の出来事における捉え方や意味づけを明らかにするアプローチとしてナラティブ・アプローチがある(Bruner, 1990)。ナラティブ・アプローチでは、当事者における経験の仕方を捉えるために、語りに注目して出来事の意味づけ方を明らかにする(やまだ, 2000・2007)。ナラティブ・アプローチにおいて、当事者の人生の意味づけをインタビューから引き出すための手法がライフストーリーインタビューということになる(やまだ, 2005)。そこで、本稿ではA氏に対してライフストーリーインタビューを行い、断絶から継承に至るまでの意味づけを明らかにする。

インタビューを実施した場所はA氏の陶芸を行う作業場兼ギャラリーであり、2015年2月に行われた。質問は大きく3つの軸から行っており、具体的には「出生から陶芸の道に入るまでのプロセス」、「X焼に出会うまでのプロセス」、「X焼の復活に至るまでのプロセス」になる。この3つの軸を中心としたインタビューは3時間ほど1対1でおこなった。インタビューを行った後、得られたデータはすべて文字起こしを行っている。

調査を開始する前に研究協力者に対して事前に作成した調査同意書を確認してもらい、プライバシーや情報の保護に関して説明を行った。技術の復活という主題においては匿名よりもむしろ名前や技法名を出すことが調査協力者の要望として出てくることもある。その場合に備え、実名でインタビューに応じるリスクに関して説明を行った上で、A氏に意志を確認したところ匿名を希望し、かつ技法名も非公開を希望した。

データはインタビューにおける「出生から陶芸の道に入るまでのプロセス」、「X焼に出会うまでのプロセス」、「X焼の復活に至るまでのプロセス」という3つの軸のうち「X焼の復活に至るまでのプロセス」を中心に取り上げた。本稿では対象とするデータに関して質的分析を用いた。手順としては対象とするデータを分割してラベルを与えていく。次にラベルを時間順序に並べ、A氏の語りを出来事と意味づけに分ける。そうすることで、インタビューの中でA氏が語った出来事をA氏自身がどのように意味づけていたのかということを視覚的にわかるようにしていった。そのようにしてA氏のX焼の復活に至るまでの出来事とそれに対応する意味付けに関する時間的な流れを明らかにした。

3. 結果

A氏は30歳前後になると独立して自分の窯を持ちたいと思い始める。その際にX焼との出会いがある。この経緯についてA氏は次のように語っている。

自分ももう30歳前になって、そろそろ独立したいと（思いが芽生えた）。その時地元で探してたんですよ。（師匠から）独立する許可を得たんで。そういう時に師匠から電話があつてですね。教育委員会がうちにきて、X焼っていうのが廃れている。職人さんが一人おるっていても、息子も誰もやらんと。何とか火が消えないように、ある程度技術を持った人が来てくれるといいなっちゅうような話をしたらしいんです。そしたら丁度もう、うちの弟子が免許皆伝のおるっちゅうて、言われたんですね。それで電話がかかってきた。とにかくY市の教育委員会に行ってみろっちゅうて。半信半疑で行ったんですよ。そしたらね、話がね、当時の町長とかもね、えらい乗り気になってですね、で、教育委員会が主導。トントン拍子でねえ、話が進んでですね。

このように廃れたX焼を継承する存在としてA氏に声がかかり、土地の選定や工事費の貸与など教育委員会主導で様々な便宜が図られた。この当時の事情に関してA氏は次のように語っている。

教育委員会が最終的に決めて、あの一、いい土地をじゃあ探そうということで。あっちこっち探されて、ここはどうだろうかってところをね、こうね。工賃は町が貸す、貸すから、自分で建てて窯を作りなさいよって感じで。

この当時、教育長からはY市に窯を作るにあたって、A氏が自らの作品を作ることは積極的に行いたい、最終的にはX焼を継承してほしいと言われたという語りをしている。

当時の教育長は自分の学んできた焼き物を作ったらいいっちゅうことですね、Y市にそういう火が、窯が絶えないようにしたいっていうような教育長の大きな考えだったんですね。でもまあ、あの少しずつ勉強して、最終的にX焼も残していつてよっちゅうような話もありましたね。

X焼を継承する窯元は一軒あったが、A氏はその窯元やX焼の継承者の当時の様子として次のように語っている。

(X焼の継承者は)職人肌の人で。すごくね、頑固な。頑固一徹の方だったですね。まあ、当時はだから、そのX焼っていうものに対して子供たちは魅力を感じなかったと思うんですよ。そこの子供たちはね。で、まあそのX焼そのものがもう廃れているものばっかり作ってたから、火鉢とか。

A氏はX焼を継承するためにY市に窯を構えたため、X焼を継承者から学ばなくてはならない。そのため、足しげく継承者の窯元に行くことになるがなかなか教えてくれない。この点に関してA氏は次のように語っている。

教えないんですよ。何度のとこでこうしないとだめ。このぐらいの乾き具合でしないとだめって、道具はこういうの使わないとだめっていうのあるんですよ。そういうの絶対教えないんですよ。で、いろいろ自分も、周りの人が言うことを聞いたり。で、やってもなかなか思うようにいかないですよ。肝心なところがやっぱり、うまくいなくて、で、それもあってね、ちょっと私も。あの一頓挫してたところもあると思うんですけど。

また、教えないというだけではなく、家の訪問も断られたことが頻繁にあったようで、A氏はその時の様子を以下のように語っている。

電話して今度いついつ行っていいですかって言ったら、いや来んでいいって言われるぐらいでしたからね。だからもう、突然行ったらいいんでしょうけどそれ失礼だしね。で、やっぱり行くといろいろ見えるから、まあ、見せたくない所もある。何かやっぱそういう、何ていうんですかね、微妙なところがやっぱり自分は親父と息子の関係じゃないからですね、やっぱり教えてくれなかった。

そのような中で窯をY市に構えたA氏は、途絶えつつあるX焼を継承する存在としてメディアに取り上げられるようになった。そのためX焼自体にもこれまでにないほど注目が集まることになった。結果としてX焼自体の価値が上がるという状況を産む。

若手がこう、窯を開いて継承し、窯の火を消さないで残すっていうことで、そういう新聞とかさ、テレビなんかも出たと思うけど、あれ、取り上げて下さったんですね。結構マスコミで騒がれたわけですよ。それまでX焼っちゅうのはそんなに騒がれてなかった。そしたらやっぱり、X焼してる継承者もやっぱりずいぶんね、違いますよね。他の人達も注目する。で、茶道具も少しやってあった。その茶道具なんかをあの、引き立てるって感じで、展示会もされるようになったんですね。うん、画廊なんかも扱うようになってね。だからもう、値段もこう、が一っと上がったんですよ。

このようにX焼自体の価値が上がることはA氏にとっても望ましいことのように思えるが、そのことが却って難しい状況にしまっている。X焼の評判が上がることで継承者の息子や娘の婿がX焼を継承したいと学ぶようになった。

そうしているうちに今度はですね、マスコミが騒ぎだしたもんだから、今まで見向きもしなかった親族がやると言い出したんです。私もね、若い時だからね。親族がやるならそれが一番ええやろと。ねえ。それを邪魔する、ではないですけどね。そして、離婚されてた嫁さんの旦那がやりだしたんです、縁が戻って。そしたらほら、親としてはその、そちらに教えたじゃないですか。その、嫁さんの旦那が結構、上手にやってですね。そしたら、お姉さんの弟も、陶芸の学校に行き出したんです。焼き物の。

X 焼の継承者も家族の中で後継者が産まれたことで、より一層 A 氏に対して対応が冷たいものとなっていく。

自分は十何年間か修行したけど、修行では何から何まで全部教えてもらって、手取り足取りでやってもらってきた。で、身に着いてきたと思ったけど、親父さん（X 焼の継承者）の教え方は全然違いました。よそから入ってきて、そのときどき行ってからね、教えてくれちゃうでも。まあ職人肌の人だし。横からと入ってきたとはいえ、跡取りもいるしね。何かまあ、お金で買ってね、パッと教えてもらえるものでもないだろうし。とは言っても向こうも知らん顔はしたくないから、いろいろおっしゃるんだけど、何か全然違うようなことをおっしゃってるんで、何か、こう、何か不信感持ちますよね。

A 氏が X 焼の継承に対して難しさを感じていたとき、一方の X 焼の継承者のほうでは跡目争いが起きており、結果として X 焼の継承者の息子が自殺するという状況になる。

（誰が窯を継ぐかで）もう兄弟げんかみたいになってですね。お姉さんのその、旦那と弟との確執が。まあその、私もその、身近でそれを見たわけじゃないですけど入ってきた噂で、いろいろ確執が生じてしまって、裁判沙汰とか。そんなことになっちゃって。で、結果としてね…その弟が自殺しちゃったんです。

このような出来事が起こった後に、最終的に娘婿が X 焼を継承者から学ぶようになる。一方で、A 氏としては X 焼の後継者が現れたことで、X 焼から距離を置くようになる。

そのお姉さんの旦那が、まあ、跡を継ぐことに。弟が自殺しちゃったからですね、娘の旦那やから。結局そっちに教えてですね。で、結構やって。でも私もちょっともう、そっちの娘婿がやるんだから、ちょっと私はこっちはこっちでやるよって感じで、それから私、少し離れたんですよ。疎遠になったんです。

息子が亡くなった後、しばらくすると X 焼の継承者である父親も亡くなっていたようで、A 氏は次のように語っている。

（X 焼の継承者が亡くなったのは）は一、昭和の最後でしたね。娘婿がやりだしたんです、代わりに。それで長くやってきて、うん。

そのまま娘婿が X 焼を継承すればよかったが、X 焼の継承者の娘と娘婿が離婚してしまい、娘婿が Y 市を離れて別の場所で陶芸をするということになってしまう。

（娘婿は）娘さんと仲が悪くなるんですよ、その人が。で、離縁するんです。で、他の人と再婚を。だからまあ、結局こっちに居られなくなったのか、自分の方で何か、別の地域に移られたんですよ。

このような背景があり、一時期 Y 市という地域から X 焼を作る人はいなくなってしまう。結果的に、A 氏が X 焼を継承するということになるがその時の経緯について A 氏は次のように語っている。

とにかく、いつの間にかやってるっていう人が向こうに移っちゃったんですね。それで気づいたら向こうに移ってたっていう感じ。いつってはっきり覚えてないですね。…少しずつ X 焼をせんといかんっていうことで、ちょっと私も考え出したんですかね。うん。うん。（Y 市という地域から X 焼がなくなってから）7, 8 年あったかもしれないね。

このように途絶えてから少し時間をおいてから A 氏は X 焼を継承するという事になっている。このことについて、A 氏は次のように語っている。

直系のその娘婿がやっているから私は後継者だとは言えないですよ。ただ、そういう気持ちでずっといたので、ああ、向こうに行かれたんだって、びっくりしたんだけど、ということは、もう誰もその、やる人もいないんだなあーということで、認識がスーッとこう、つのってきたんですよ。すぐってことじゃなかったんだけど。なんかそれがどうしても必要だったんですよ。この複雑、複雑っていうか特殊な事情ゆえに。まあ（X 焼の継承者が亡くなって）30 年近くたてば悪い影響もないだろうと、自分もここで、地元でいろいろ貢献してきたんだから。しっかり看板上げたって誰かとやかくいう人はいないだろうっていう気持ちがしっかり出てきたっちゃうか。

A 氏自身、Y 市という地域に窯を構えた経緯からしても X 焼を継承するというのはある意味で自明の道であった。しかし、特殊な事情を抱えた X 焼の看板を背負っていくためには自分の中での相応の動機も必要だったようで次のように語っている。

色々と、あの、骨折ってくださった人たちの気持ちも汲み取っていきなりいけないし。X 焼っていいんじゃないかというようなイメージもあったんですよ。まあ、他にはないからですね、この焼き物が。ここにしかない焼き物だから。で、ここの土地で絵の具使って、ここの土地の土を使ってやってるんです。それこだわってね。Y 市の土でやってますっちゃうこと言ってたんでね。一つの焼き、全然違う焼き物があるわけですからね。技法も違うし土も違うし用途も違う。再認識するための時間がかかったっていうかね。勉強にも時間がかかったっていうか。まあそういう、学んでいくうちにやっぱりこう、価値を再評価する、再認識する。というのはやっぱり。時間がやっぱりどうしても。まあ、もっとね、勤勉にやれば違ったんでしょけど。まあ生活しながら、それは、その。認識が強まるまでやっぱり、時間がかかったっていうか。そして、本気を出すまでにそういう壁があったもんだから。

実際、A氏はあまり積極的に教えてくれなかった状況であったため、娘婿がY市を離れた後にX焼の技術も磨くにしても、過去にX焼の継承者が語っていたことを基に試行錯誤するしかないような状況であった。この点に関してA氏は次のように語っている。

試行錯誤してね。で、失敗を重ねて。で、あの、なかなか話してくれなかったんで、その人がちらちらと言った新聞記事なんか、みんな全部ストックしてるんですよ。こう、もう一回読み直してその言葉の端、ぼろっと言ってるところあるんです。あ、これじゃないかなあと。そこに目を付けるっちゃうか。それでこう、一点集中してそこで試みて、そういうのとかくやりましたね。うん。で、やってもうまいかないでしょうね。どこかが、いかんやったわけですね。そこをその、ある程度までいいですよ。その、使い方の点とか。それも温度の点とかね。言葉としてはこうやってこうやるっておっしゃるけども、それがそのまま簡単にはできないですよ。だからあの、頭の中でずーっとか、考えてる期間とか、ずーっとか、ちょっちょっと端々に言ったこととか、端々、私がちょこちょこっと昔撮ってた写真とか、そういうのよーくこう、黙考するっちゃうか。失敗したらもう忘れちゃうんですよ。もう、ピシッとか、書いてからずーっと系統立てて研究していればそれでいいんですけど、なかなかね。で、そういうのを段々こう、ピシッと取ってきて、まとめたりしてこう、整理しました。と、なってくると、段々こう、明快になってきたんですよ。うん、うん。それで、パッとある時ひらめいたりするんです。あ、これがいけなかったのかーって。で、やってみるとまあ一番感動したのはやっぱり、もうこの、黒く燻すんですけどその燻しがうまいいった時なんですよ。それが温度がもう、5度も。私の窯ではね、15度違うだけでだめだったんです。

A氏にとってX焼の技術的側面の習得に時間がかかったのと同じように、A氏が持っていたX焼の固定観念を壊し、価値を再認識するまでも時間がかかったようでこの点に関して次のように語っている。

それまでは何か古臭いものっていうイメージもあったけど。まあ火鉢なんか使わないしね、と思ったんですけど。でも、今思うと、もっとその、こだわらなくていいと。まあ、名のある先生方の意見もあったんだけど。X焼っちゃう昔の作風はある、ありますよね。それをまあ現代の花器に活かしたっていいんだと。まあ何作ってもいいわけですよ、うん。それはその、何ていうか、制限はないっちゃうかなあ。変にこう、自分でこう、殻を作ってたようなところがある。

さらに、自らがX焼について自らが持っていた殻を崩して、より積極的に未来を考えるようになったときに次のように新たなX焼を提案できないかと考えるようになる。

結局廃れて行った原因っていうのは、使われなくなったからですよ。必需品じゃなくなったから。昔は必需品だったからもう、盛んに、作られてたわけですけど。まあ何万个っていう作品。しかもね、焼かれてたわけですけど。だから、X 焼を何か現代に活かせないだろうかとか、あるいは現代生活を X 焼が占める。そういう生活様式を提案できないだろうかとか、そういうイメージはあったんですね。

具体的に A 氏は X 焼が現代生活の中にどのように位置づけるのかということに関して、自らが継承を決めた後、徐々に深めていき、現在では以下のように意味づけている。

これまではもう、ちょっと表面的しか知らなくて。ちょっとやってみて失敗したりして。で、いろいろ事情があってちょっとう、敬遠したりしよったんですけど。まあ、いよいよ二人もやる人がいないってなって、もう私がやるしかないんじゃないかということで、またその、えー、遠慮せずにやれるっていうね、うん。もう誰にも何にも気兼ねすることなくやれるってもうなってるからですね。もう自分でやるしかない。思って来るとだんだんそういうのがね、学んできて、認識が深まってきて。同時にね。そしてそういう昔のものだけじゃなくて、新しいものでも変わらずやっていけるっていう、それが伝統なんだっていう考え方に、伝統に対する考え方も変わってきたし、X 焼の現物の、そのものに対しての認識ももっと変わってきましたね。そしてそういう生活様式っちゅうんですかね、昔の生活様式で使われていた必需品とか、まあ、電気、えー、ガスがなくなったら、生活、人間どうやってやるか。火鉢じゃないとダメなんですよ。炭がないと生活できない。だから、これはやっぱりほんとに真剣にやっていかなきゃいけない。同時にみなさんにそれをこう、何ていうか、提案していかなきゃいけないですよ。そういうね、価値、認識。

このように、過去の閉塞した状況から現在の展望が開けた状態に至るまでの経緯について A 氏は以下のように語っている。

展望が開けてきたのは愛着を強めたからだと思うんですけどね。はい。何とかやろうという、もうとにかく、ものにしようっていう昔の同じものの再現。まず基本はそうですね。再現できるようになろうっていうことで、始めたんで。はい。それやってるうちに、こういうものできるんだとか、できたんですよ。あ、これは新しいものとして発表できるな、となると展覧会出せるじゃないかって。出せますよね。それまではもう、いわゆるこう、古いけど地元の伝統あるものをちゃんと作って残して何とか、そういうお茶の世界とか、まあ関心示してくれる人に販売する程度かなあって感じしかイメージ持ってなかったんですけどね。やってるうちにですね、何か。

4. 考察

考察では本稿の目的に沿って伝統の断絶が継承にもたらす積極的な側面という点から深めていくこととする。具体的には「伝統が途絶えることで促される継承という視点」に関して、「受け継ぐ技芸の可能性の認知と継承の関係性」という2点を中心に考察を進めていきたい。

1 点目が、「伝統が途絶えることで促される継承という視点」に関してであった。X 焼は A 氏が来ることでメディアに取り上げられ、結果として息子や娘婿が跡目を争うことになり、息子が自殺してしまう。最終的には娘婿が跡を継ぐことになるが、娘婿も X 焼の継承者の娘と離婚をしてしまうことで継承者が一時的に Y 市という地域からいなくなってしまう。そこから6、7年たったのちに A 氏が X 焼の継承者ということで看板を掲げるようになる。このように X 焼は複雑な事情をたどりながら、誰も継承者がいないという空白期間があったうえで A 氏が継承するという流れになっているのである。

X 焼は歴史が古く、その分だけ X 焼の最後の後継者としてもできるだけ家族に継がせたいという想いがあったと推察される。その想いは A 氏が Y 市に窯を構えるまでは難しいものと思われたが、A 氏がメディアに取り上げられることで親族が X 焼に興味を持ち始め、現実的になんかえられそうなものになった。しかし、息子が自殺し、娘婿も離婚するなど複雑な事情を抱えてしまう。そのため、A 氏としても X 焼の後継者ということを直ぐに名乗るのは難しい。従って、ある一定の期間、途絶えさせることを通じて X 焼の持つしがらみが解けるのをまって、自らが X 焼の名を名乗れるような状況になってから、継承を果たしている。

長い歴史を有する技芸には、複雑な家族の問題や地域の問題、制度の問題など、後続の世代がその技芸を受け継ぐにあたって障害となるような問題がある。原則として家族以外のものが継承することは許されないという厳しい条件を持っているような技芸もあるだろうし、教育制度として必ず住み込みで長い期間修行をしなくてはいけないという条件を持っているような技芸もあるだろう。あるいは共同体としても必ず指定された形式で受け継がねばならないという厳格な形を持っている技芸もあるものと考えられる。時代の変化と共に継承に当たっての条件が変化していくということはもちろんあるだろうが、継承者がどうしても譲れない部分が残っていたり、継承の際に争いがあつたりすれば、たとえ跡を継ぎたいという存在があつたとしても、継承を困難なものにしてしまう。無論、そのような状況でも敢えて火中の栗を拾うつもりで途絶えることなく継承を果たすということもあり得る。しかし、無理をすることで周囲と軋轢を生んでしまい、結果としてより継承が難しい状況に陥ることもあろう。

このような継承困難な状況においてあえて一度世代を断絶させるというのは一つの方法として考えられる。続いてきた技芸の歴史が途絶えることで、しがらみはゼロにはならないかもしれないが、かなりやわらぐことになろう。X 焼に関しては関係者として X 焼の継承者やその息子は亡くなっており、X 焼の名を名乗るうえで障害となりそうな人物も非常に限られていた。関係がこじれている場合は関係者全員が亡くなるくらいまで時間を置かなくてはならないかもしれないが、いずれにしても、断絶という措置によって歴史ある技芸が継承しやすくなるということが現にある。断絶をしてしまうと

技芸の継承が滞ってしまうのではないかという懸念もあろう。A 氏においても X 焼の技術水準はまだ途上という位置づけをしている。しかし、現在の残っている過去の作品や X 焼の継承者の新聞記事などを見ながら、途上の技術を補っていくことはできている。確かに直接指導を受け、その全てを継承できればそれに越したことはないであろうが、仮に指導をあまり受けられず、断絶をしたとしてもそれで全く違う技芸になってしまうかと言えば決してそうではないのである。

2 点目が「受け継ぐ技芸の可能性の認知と継承の関係性」という点であった。A 氏としても単純にしがらみがあって継承できなかっただけでなく、X 焼の可能性を見出すことができなかったという側面も存在した。X 焼は火鉢など現在ではあまり使われていないようなものを中心に作られてきた。そのため、後続する世代のものにとっても魅力的なものとして映っていなかった。そこに加えて、後継者騒動があったため、A 氏としては X 焼を継承する意欲を持てなかったという面もあろう。無論、A 氏としては X 焼を受け継ぐために Y 市に來たという経緯があるため、その前提をないがしろにするというわけではないしろ、A 氏自らの中でもあまり教えてもくれないし、後継者問題でゆれているようなそこまで魅力的でもない技芸を積極的に受け継ぐ気にはなれなかったというものの実態としてはあるものとして考えられる。

この時、継承に向けて A 氏自身が積極的になれた要因として X 焼の可能性の発見という点があったことが語られている。伝統の捉え直しという点において A 氏は古くから伝わり、X 焼の最後の継承者も作っていた火鉢を主体とするような焼き物を継承するという必要を感じていた。しかし、火鉢以外にも花瓶などに積極的に広げてもいいし、あるいは火鉢を使った生活様式を環境にやさしい生活の在りかたとして提案していくというやり方もあるといったように X 焼の可能性に目を向けるようになった。X 焼の可能性に目を向けるようになると、技芸の習得にもより熱が入るようになり、結果として X 焼を継承するという意識が強くなっていったという流れがある。

ここまでの A 氏の継承の流れを見てきてもわかるとおり、技芸を継承することにおいては継承する対象に対して積極的にコミットメントできるようになる必要があるといえよう。X 焼の未来を積極的に考え、現在の陶芸の世界やそれを使う人に対して新たな提案ができるという価値を感じたからこそ、X 焼の過去を受け入れ継承に至っている。どのような技芸であれ自分のものにするには時間や手間がかかる。そのため、新たに X 焼という A 氏にとってはなじみのなかった焼き物を継承するためには自分を納得させるための理由が必要になる。A 氏の意味づけからも理解されるように、未来への可能性を感じ、その可能性に積極的に自らが関わりたいという価値が見出されたときに、過去が受け入れられ、継承に至っているのである。

ここまでみてきたように、A 氏が X 焼を継承するためには一定の時間と継承をするだけの可能性を見出す必要があった。そして、その二つが達成されたからこそ継承に気持ちが向かい、新たな X 焼を創造し、それを社会に問うという意欲の元、積極的に創作活動に取り組むことができるようになった。このように、伝統が途絶えるということはそこまで続いてきた伝統それ自体の消滅を意味するのではない。むしろ、途絶える中でしがらみが消え、より自由な形で X 焼が再構築され、それが結果として X 焼のイノベーションへとつながるものと考えられる。このように考えるのであれば、世代

と世代が直接的に教え合って次の世代に伝わることが必ずしも全ての事例において良い事なのではなく、状況においては途絶えさせることによって自由度が高い状態で次の世代に伝えていくというやり方もあり得る。このように A 氏と X 焼のケースは世代間継承を考える上で貴重な事例になっていると言える。

参考文献

- ブルーナー, J. S. (1998) 意味の復権——フォークサイコロジーに向けて(岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳). 京都: ミネルヴァ書房 (Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. New York: Harvard University Press).
- 俵木悟 (2015). 「護るべきもの」から学ぶべきこと—民俗芸能研究のフロンティアとしての無形文化遺産. 民俗芸能研究, 59, 56-75.
- 竹内一真 (2011) 専門家の技能に関する先行研究と現在の動向——ポスト正統的周辺参加論における「教え手」の位相. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 407-419.
- 竹内一真 (2013) 実践を通じた教育における伝承者による伝え方と世代間の語りの関係性——正統的周辺参加における十全的参加者による経験を伝えるということ. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 59, 625-637.
- 竹内一真 (2015) 現代社会における実践知の越境に関する先行研究とその意義——世代を超えて経験が伝わっていく仕組みと学校教育の限界. 多摩大学グローバルスタディーズ学部, 8, 109-121.
- 竹内一真・やまだようこ (2014) 伝統芸能の教授関係から捉える実践を通じた専門的技能の伝承——京舞篠塚流における稽古での「こだわり」に焦点を当てて. 質的心理学研究, 13, 215-237.
- やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編), 人生を物語る——生成のライフストーリー(pp.1-38). 京都: ミネルヴァ書房
- やまだようこ (2005) ライフストーリー研究. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学(編), 教育研究のメソドロジー(pp.191-212). 東京: 東京大学出版会
- やまだようこ (2007) ナラティブ研究. やまだようこ(編), 質的心理学の方法(pp.54-71). 東京: 新曜社
- やまだようこ(2011)「発達」と「発達段階」を問う——生涯発達とナラティブ論の視点から. 発達心理学研究, 22(4), 418-427.
- Yamada, Y. & Kato, Y. (2006) Images of circular time and spiral repetition : The generative life cycle model. *Culture & Psychology*, 12(2), 143-160.